

全国でも稀な「月例フットパス」を五年間続けながら、「湿原再生」をスローガンに「ホロムイ七草」を復活させる活動する「NPO法人 ふらっと南幌」の第六回定期総会が八月十一日に開かれた。濱田代表は「我々の活動は多方面で高く評価されている。来年度も農水省からの交付金も採択されたが、他の財源を導入しながら事業化を目指す」とあいさつ。昨年度の活動実績及び決算を承認するとともに、来年度の活動案と予算案も全会一致で決定した。

フットパス&「七草復活」 ～収益事業へ より大胆に

来年の全道大会で
「ぐるっと南幌リバーコース」をお披露目

平成二七年度の予算規模は昨年度より百五十万円少ない約五百五十万円だが、他の財源を導入を目指して大胆な活動を展開する。役員人事では個人的な理由で退任した二名の理事の代わりに元副代表理事であった近藤氏が事務局統括兼務で理事に就任した。同年度の活動計画は月例

代表理事	濱田 久保	酒井 高橋	布谷 松平	新藤 市川	井上 片岡	近藤 牧野	鈴木 今野
同 同 同 同 同 同 同 同	同 同 同 同 同 同 同 同	同 同 同 同 同 同 同 同	同 同 同 同 同 同 同 同	同 同 同 同 同 同 同 同	同 同 同 同 同 同 同 同	同 同 同 同 同 同 同 同	同 同 同 同 同 同 同 同

二〇一四年度役員名簿

(札幌市)	生 曉一郎	(札幌市)	山 純一	(札幌市)	久 保直忠	(札幌市)	酒 井裕司	(札幌市)	高 橋正一	(札幌市)	布 谷武幸	(札幌市)	松 平敏明	(札幌市)	新 藤建夫	(札幌市)	市 川達也	(札幌市)	井 上すみ子	(札幌市)	片 岡功人	(札幌市)	近 藤真人	(北広島市)	牧 野由美子	(北広島市)	鈴 木政俊	(北広島市)	今 野頼子	(北広島市)
-------	-------	-------	------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	--------	-------	-------	-------	-------	--------	--------	--------	-------	--------	-------	--------

ふらっと南幌会報

発行元

NPO法人
ふらっと南幌

南幌町栄町
4丁目4番19号
378-2203

おこわり

間が必要で定期総会開催が大幅に遅れました。陳謝するとともに「会報九月合併号」としてお届けします。

フットパスのほかに、ロングトレイルをを通し南幌再発見に取り組む。来年七月の「第二回全道フットパスの集い」は四川に囲まれる南幌リバーコースをお披露目、三箇所からスタートする。また、札幌市（都市部）と南幌町（農村部）をつなぐ広域フットパス「縄文古道と松浦武四郎の親た世界」（百キロ踏破）に挑む。一方で、収益自主事業（エコ田んぼ、当別高校とのミズゴケ培養実験や里親制などを企画する。

二年目の挑戦

観光ツアーとして定着



シーブーツアーズ企画
上/田植え後の集合写真 中/草取り 下/生き物調査



eco田んぼ

一九九〇年から無農薬・無科学肥料の農産物栽培に取り組んでいる「佐藤農場」の協力で昨年から始めた「エコ田んぼ」も今年も三反（過去五年間、無農薬・無肥料）を提供していただいた。六月一日、オーナーら十八人が「田植え」を体験（写真上）した。裸足で田んぼへ。転ばないように横一列に並んで苗を植えた。佐藤さんは「米を育て収穫する過程を堪能できれば」と期待する。

それから一ヶ月半後の七月十二日、オーナーと一般参加者で「草取り」。これは榊シイビーツアーズとのタイアップ企画で子供四名を含む十一名が参加。株間のミズアオイやオモダカなどの水草を両手いっぱい抜いていた。その後、榊アレフから橋部佳紀さんを講師に迎え「田んぼの生き物調査」も実施。環境省レッドデータブックに記載されたマルガタゲンゴロウなど二種を発見した。「稲刈り」はさがけは九月二日、同農場で開催予定。

高校生が初設定～ 当別グリーンライフコースを歩く

園芸デザイン科造園緑化班が主催



今年三月から五月にかけ、札幌や南幌のフットパス団体主催の日帰りツアーに参加した、当別高校園芸デザイン科造園緑化班は六月十四日、自ら設定したフットパスコースをお披露目、ふらっと南幌から六名が参加。運営指導は当会が担当した。参加者は約三十名で高校生が主体的にツアーを企画・実施するのは道内初。イベントを主催する生徒は二、三年生十二名で、三ヶ月前から、ふらっと南幌の月例フットパスに参加、準備を進めていた。さらにコース内で草が伸びている箇所では、生徒全員で手鎌による草刈りも行った。当日は地元の産業や歴史、自然環境を感じる事が出来るコースを歩く。畜産農家、花卉農家、地元小学校、自家園芸愛好家を訪ねる十キロ。昼食後、

この方式の継続と交流の質の向上を図る。交流会としての昼食は後藤宅横のスペースに簡易テーブルを設ける。恒例の南幌ジンギスカンをはじめ、取れたての地元野菜、燻製タマゴやスイカに舌鼓を打った。特に初参加の当別高校生の食

つぶりには驚いた。なんと一人で五合のご飯を平らげる。「大食い選手権」を見ているようだ。実に「あつぱれ」。次回からも「若者」の参加を望みたい。スタッフの若返りとともに。



歌志内歩こう会 南幌を歩く 高齢者に配慮 花街道ヘルト変更

「街興しの起爆剤」と位置づけられたフットパスより九月七日「歌志内市民歩こう会」三十一人が来町した。主催は同市の教育委員会社会教育グループ。教育長の引率。当初、北海道新聞百選の「運河コース」設定したが、八十歳以上も参加したことで三重の「花街道」に変更。エコ田んぼなどを視察。

演劇部所属の生徒による合唱「ふるさと」が披露されるなど、随所に生徒の「おもてなし」が感じられるイベントとなった。



～「ミズゴケ大規模栽培の試行へ」～ 星教授の最終講義

昨年、「ミズゴケ栽培法」の伝授を受けた、熊本・東海大学の星教授が八月二二日、四度来町され「ほろむい七草勉強会」これからのミズゴケ栽培の可能性」と題して「カナダ方式の大規模栽培」へと向かう最終講義を行った。初日は新千歳空港から恵庭・雪印種苗の実験施設を視察。その後、南幌ビューローで「勉強会」。翌日は三重公園から新夕張川の試験地までの「フットパス」～「ジンギスカン昼食会」再びビューローでの「七草研究会」。カナダ視察かフォート氏講演で大規模栽培を実践、官民の連携・協働体制づくりの必要性が強調された。参加者は開発局と美唄などの研究者ら二十名。

東海大学
(熊本)
星教授

再び来町(最終講義)
ミズゴケ事業化へ

幌向七草
再生も
一步前進

栗幌橋からの絶景を楽しむ

植生再生試験地と有機農家を巡るフットパス「夕張川と大地の恵みルート」には新たに元JTB専務らも合流。栗幌橋からの眺望を楽しんだ。新夕張川の再生試験地は「ばら撒き方式」の実験を視察。ピートモスの上からの散布も有効とのこと。これらの結果をもとに「七草研究会」により深く検討。(三頁へ)



三重公園に移転した
フロート式ミズゴケと苔庭



南幌はもともと泥炭地、ちゃんとした土木
工事が出来れば「乾燥ミズゴケ」を使わな
い「ばら撒き方式」で増産可能。「ほろむ
い七草再生活動」の現況は、イチゴの組織
培養を含め、四種類の試験培養に成功。里
親制度に向けて動き出した。当別高校園芸
デザイン化と連携できているが、地元の中
・高校生へアプローチも必要。新夕張川と
晩翠遊水地での試行も進行中だ。
関連した動きでは美唄湿原の笹刈り試験。



Ⓛ新夕張川河川敷の試験地視察
Ⓧ美唄湿原での笹刈り実験



昨年、自生のイチゴのメスが極端に減少したこと
を受け、その原因追及と「七草の植生変化」のモ
ニタリングが目的。「ふらっと南幌」七草の会
(仮称)は六月十二日、剪定ハサミで丁寧に笹を
切り取った。同月、比較用の試験地も設けた。
また、同時並行して育苗をWP依頼している「赤
平オーキッド」からはツルコケモモ苗(四種)約
二千株とリンドウ苗五百株が届いた(九月九日)。
大半はプラスチック苗(栄養ゼリーに植えられた)、
三カ月後にピートモス床へ移植。(五頁に続く)

幌向運河下りII軽トラネットワークで十五回目

平成十二年から続く「幌向運河イカダ下り」が七月二十日、「ふらっと
南幌」の月例フットパスとして行われた。参加者は当別高校生に名を含
む、二十名。南幌ビューローに集合、みんなで出発地点(後藤橋)まで
歩き。ゴムボートに乗って「運河下り」。終点(北星橋)から出発
点へ。風に穂がなびく田んぼを見ながらジンギスカン昼食を楽しんだ。



上/ビューローより運河下り会場へ向かう
中/歓声賑やかな出発点 下/交流会風景



十五回目ともなれば、運営側も進化。動線
の簡素化することで参加者とスタッフとの
交流を重視した。今回は昼食場所を出発点
近くに設定、後片付け作業も全員で行うこ
とが出来た。初参加の当別高校の男子生徒
二名のみで常連組が主流。午前十時集合か
散会した午後三時までスムーズに進行、ゴ
ムボートや単管で組み立てた船台の撤去も
日没まえに終了した。今後(七頁に続く)



二市一町の現地視察後、第3回ワークショップで真剣議論

北海道 開発局

石狩川振興財団「川と人」

ふらっと南幌を紹介

「石狩川下流幌向地区自然再生

実施計画書」の正式発行

北海道開発局札幌開発建設部が実施する「石狩川下流幌向地区自然再生ワークショップ」が七月四日、開かれた。第三回目（二月二四日と三月二四日にも開催）。札幌市、美唄市、南幌町での現地視察後、取りまとめ作業を行い、正式に「石狩川下流幌向地区自然再生実施計画書」の発行を報告。

同ワークショップには「ふらっと南幌」から濱田代表と事務局の二名が参加。視察地は平岡公園の人工湿地と美唄湿原、新夕張川河川敷。正式発行の「実施

辻井辰一先生追悼～ 湿原学会特別シンポ開催



故・辻井先生を追悼しようとして九月六日、北海道環境財団主催の「日本湿地学会の特別シンポジウム」が開かれた。北海道各地で湿原保全を主眼に活動している団体メンバー約百八十名が北大農学部講堂に参集、基調講演後の十

三団体による「湿原笑点」で盛り上がった。翌日は南幌など自然再生試験地を中心に視察した。

はまなす財団

地域セミナー

産業振興を目的に「地域づくり活動」を支援する「はまなす財団セミナー」が九月八日、京王プラザで開かれた。「北海道は恵まれているが、人の和がない」と辛口講演（薬谷氏）と五つの活動報告。

計画書」に関わる「ふらっと南幌」の活動内容は「現地環境の定期的・継続的な記録、視察、報告、情報発信」と「試験地の維持・管理・観察

会など現場運営、サポート」

「フットパスなどを通じた

現地視察や体験学習などの実

施」の三点。いよいよ動き出

す。十月星教授が来町予定。

「湿原の保護」=辻井達一氏の遺志 石狩川フォーラム報告

根岸 淳二郎 氏



平成 9年3月 北海道大学農学部卒業
平成13年7月 カナダ・プリティッシュ
コロンビア州立大学森林学部
修士課程修了 (M.Sc.)
平成18年1月 シンガポール国立大学
地理学部 博士課程修了 (Ph.D.)
平成18年2月 独立行政法人土木研究所
自然共生研究センター
任期付き研究員
平成21年4月 北海道大学大学院
地球環境科学研究院
GCOE特別助教
平成25年1月 同校准教授

提言含めた十五回連続講演 無事終了

昨年一月から、毎月一回開いた「石狩川フォーラム」は三月二十八日、十五回で終了。「故・辻井達一氏の遺志」をとりあえず全う出来ました。今後の展開について「実行委員会事務局」は「連続講演でさまざまな提言があったので、ホームページに掲載、出来る事から具現化」と説明。現在まで三回の「自然再生ワークショップ」を開催、九月六日湿原学会も「特別シンポジウム」を開く。

河川の氾濫による影響を受けてきた土地は「氾濫原」と呼ばれる。農業生産向上を含めた土地利用により生態的機能は世界中で失われつつある。人間活動と良い

提供している。どこをどのように復元するかは計画性が不可欠。実現不可能な（例えば三日月湖と本流をつなぐ様な）事業は考えず、後背地（住民のリクレーションに資する自然地）の再生と管理手法を考えたい。今、湖沼の埋め立て工事などによって水質劣化が進んでい

湖沼自然を守る「ふらっと南幌」

バランスをとりながら、生物にとって重要なものを効率的に保全する方法を目指したい。優先順位をつけて実行に移そう。石狩川はショートカットによって多くの池や三日月湖などが存在、様々な生物に生息地を

ます。「種多様性決定の要因特定」は重要。水草や魚などの種類はその面積に比列します。より良い石狩川を作るプロジェクト①情報整理と共有②科学・社会的優先順位のバランス③再生実証試験の励行を。